

和田
定節
編輯

開明
小説

春雨文庫

第五號

上

20

25

30

35

A428
9

梅亭金鷲閣

和田定節編輯

開明
小説

春雨文庫

東京書肆文永堂



叙

此書始々春雨文庫と号し、編輯を
從てはちと重と冒平又、存淺草文
庫の如く巻と積と金澤文庫と稱し、
其名とて高、うらみんの於ては、
たゞしゆたゝが室より越中、續泉禪
と向ふまれば、見ると自かゝ其度と外し

010190508280

48-7541

家鴨り一背負せと文庫一程も
去り往きしと春雨のまるとは補たんが
結り初り後と和田のはうに定部一人が
纏らるるがまの日の二山とまはる海方
面の廣まを移りし一級ちうべし
兵も言へまこと文庫の建ちけり居
と土臺と腐るすな何様とと真

事一の文庫と方なる迄存えを海と也
編者より通り成稿の早からんことと係
証し立て印紙代りの序書とをよむ
耳南む

終りの菊花を相々傲る時

意秋園頌湖誌



安達吟光



去
河
星
梅
堤
月
夜
紙
上



曙街庵
免座

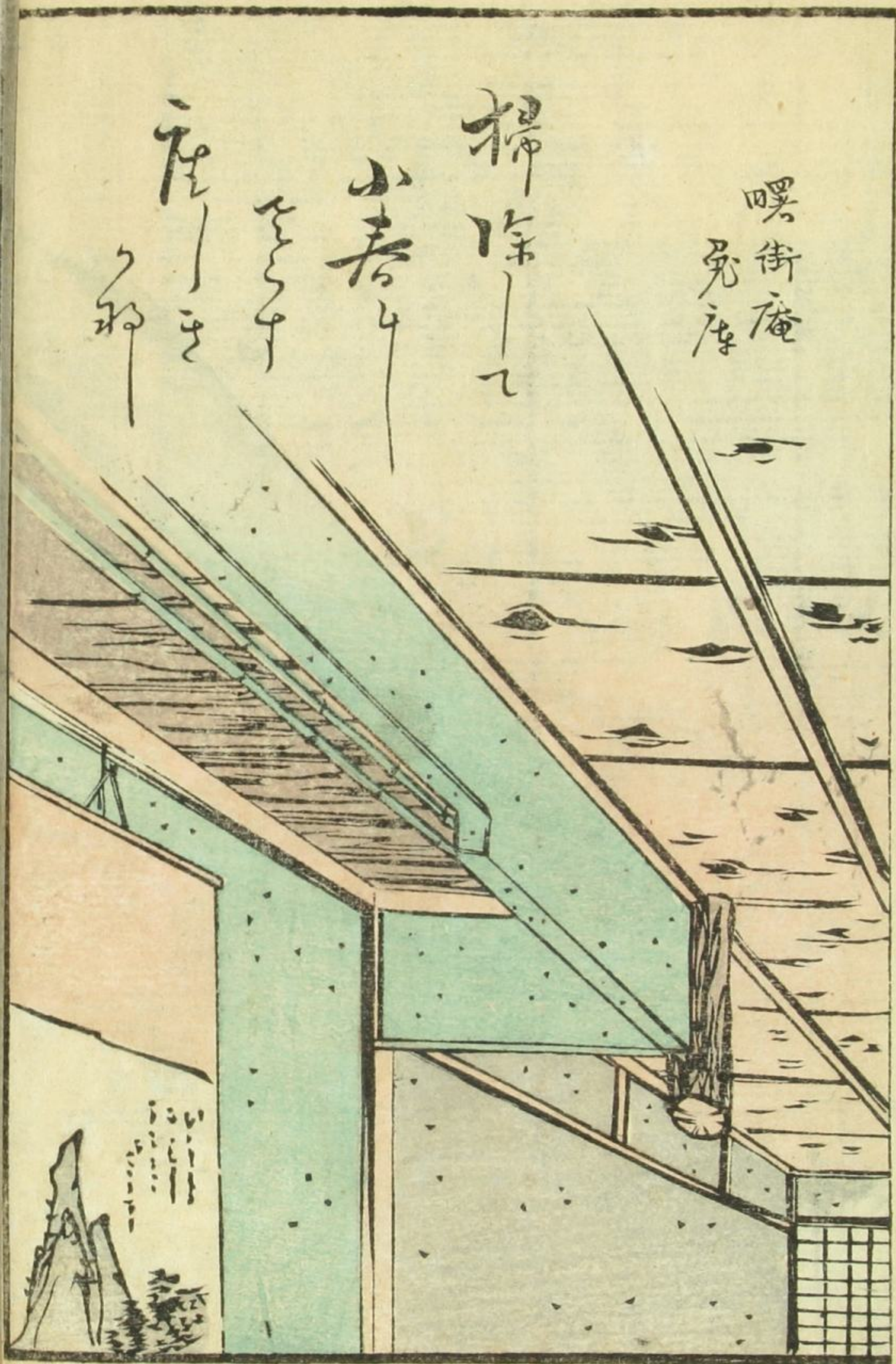
掃除一て

小春り

そらそら

庭一さ

く柳



春雨文庫第五編卷之上

東京

和田定節編集

○第十七回

門守る犬の遠吠も按戸針呼ぶ笛の音も繁花と
漏れて遠方小聞けを淋しさ最増して同一都も田
舎あぐ町屋をづまの差一昇る月小障りの無との
から往來の人へ絶ぐふて遙り小促がす東福寺の

鐘ボオン折から息せき俵屋清兵衛来かりたりし
が立止り耳と聳て指と折りハテ彼ハまう亥刻大
き不遅く成て喚御兩所ガお待どうで有うと私語
るぐら往かゝる北野の社の大門通り傍の松の木
蔭から「此處ぞ」清兵衛とどと呼止られ俵屋四
邊と見まとして月の明りふ木蔭を窺ひ腰と屈
めて竊々来り「桂さぬふ中村さぬで」佐佐木
イヤ最う天の口壁の耳と避ませうと思ふと何や

彼やみて間と取り大き不遅うるりまゝてお待どう
桂「ア、不い拙者共も今いまガと多まつとシテ守護職の容子
ハ如何いぢや清「然れを其領地會津よりして追々人数
と操り込と来り所司代もまゝと桑名より人を集む
るおの模様ハ全く破烈の準備と思われます中「然
て見れを此方このまふも三條公と始めとして他の六卿
へ申上豫め心組とせずハ成なりまい彼の浪士らめ催
しみて再度江戸の牙城と焼落さんとの企くハ如何

るありしう清一當十一月五日御殿はぐさひ言を待たず中
著門より三重の櫓それみ續き多門まで見事み
焼亡せし容子と聞て思はず小膝と進め吐息つき
つ歎トて言ふ桂一嗚呼徳川氏の末るるに此件み
ても知りぬべし石と墨三鐵みて續き板ハ薄きも
尺を以てし柱ハ抱へて手み餘る堅固無双の建築る
れを焼草火薬を用ひバ格別容易火の附をづる
きと一度みらず三度四度飯令附人の有れをとして

安々との成るハ何ぞや夫のそろろ近きみ到り古
来稀るる江戸市中の大地震はいて大風まゝ未曾
有の病虎烈刺ると言ふりの流行し人死すること
莫大みて加ふるみ麻疹もまゝと人を殺すと夥ど
諸國年々大水し米價日々高きみ至るを貧民寺
院み屯とるし旗と翻へし幟と押立て町奉行の役
館み迫るとうハ實み前代未聞るる國家將み亡び
んとす必妖孽あり江戸の本城かゝ易々焼亡する

如きふての會津桑名の人々から力と將軍の為に盡
すも敢て恐るゝ不足らず我輩は本國へ引き取る
の今四五日容子と見合せて後為ぞ可うらん中
村君の尊慮いらん中「勿論の事あり我輩は本國
へ退んと為るゝ暫く幕威と遁んと做るの故に
因るるり然ると仰の如く牙城西城建て焼け
建て焼する最早武運の末めて俗に言ふ天道
の悪くそと清くあらん會津桑名人數を増し見

巡り組新撰組ら何千人集るとも事あるに位を
踏ちららさん易からん今三四日たを大島へ往と
る西郷吉之助の模様も分るべきるれを出立に見
合せの方御同意あり如何に横田氏足下とも此程
頻りに幕府の者らに頼りよしるれを用心專一か
みらず油断の候し難からん桂「實に勤王の志厚き
の武士も及ぶぬ横田氏七卿の方々も力に思召し
らせらるるを此末とも何らの事を頼り入るとい言

ふりの幕府の者らぐ既不足下不迫らんと為る
よ一故一まぐ長州へ身と遁させんと既小支度と
も致せし程のとも又弥彼の地へ往まで人目小
掛らぬところふ身と忍び必ず輕却含るると做
し給ひぞ清一私も身の放埒と世間ふ示し攘夷鎖
港などの話しの嘆氣ふも口へ出ませぬが隠す
事の現われ易く誰言ふとなく清兵衛の勤王家
の提灯持ると風聞まる者あるふ因り自然守護

職所司代とうの官吏の耳ふ入り附担うよ一なれを
片時油断の致さず先の何處までも切り抜る積りで
御坐ります中一桂君の仰の如く我輩らぐ本國へ出
立のこの今四五日模様と見と上ふ為るも又其つも
りみて手配あられよ清一かこまりはしと何分同志
の黨の退屈りささぐる様おん取計らひ下されと一
桂一りつとも夫の肝要のと然とが横田氏足下の妻君
の實小貞節まりの餘り苦勞とかけぬが宜ぞへ中一

何様おの魂の堅固なるの我輩とくくと見とめとり足
 下ぐ何れど懶惰と極めても自狂どるぞとて水性の
 致さぬ保証ふの兩人が立あしと訳で長州へ出立
 の時の別れの嘸と想像らるる勾當の内侍不別れ
 新田義貞の例ふ倣ひて成ぬぞヨと言れ清兵衛の
 天窓と搔き一是の憂とお騷り何の事やら私ふの
 一向にけが訳りません桂アアといや程無く解る寐物
 語りのとも有りサ中何ぞ浮氣看板でも小常るん

ぞい宜加減ふ投つて仕舞ぐ宜う
 らうと言ひ清兵衛の背中と
 破しうつとき松の枝から滴る
 夜露路パタパタ
 ○お岩の次男庄
 吉の二歳ふるる
 ふ乳と飲せ惣領
 徳太郎の四歳ふるるふ



百人首と出しその画と見せむぐら岩「始めに在る
の天智天皇さまのお歌で秋の田の夫々何と言
とツけ坊の覚えてお在らう教えて頂戴ると言
れ徳太郎まいらぬ舌で「飯の庵の岩「夫から
徳「とまとあらくと岩「りんふ伶俐どそ左様上手ふ
成ていお父さぬがは褒美ふ宜翫弄物とお土産
み澤山下さんませうさろく此度の坊が画と出して
母さんふ見せて下され庄吉が寝ねするまぐ母さん

御本と明て居られぬいからト言れて徳太郎の百
人一首の本と開き「母ちやま是「岩「どれく「オヤ夫の
壬生忠見坊ふよめますう徳太郎の膝へ手をつき「
意すて「我名のまじさきたちみけり岩「夫「徳「人
ちへずこそ思ひそめちが岩「オ能覚えとぞドク
お菓子と遣りませうト茶籠草司の引出しより菓
子取りりごして徳太郎ふ與えぬぐらホツと息は
き岩「意まる身ふ限らず人の知らずと思ふ間ふ

憂名うきみのたやくたつ立たつりのみとつとぎんべんて夫清兵衛きんこうが勤王家きんこうとや
らともと共ともふ外ぐわい國人こくじんと日本にっぽんへ寄よねやうよせふ仕し様やうとまらと
ハ深ふかく隠かくしてこのと此身このみと始はじめ母ははさまおとや妹いもうとのお楽らくさん
みも話はなさぬと守護職しゅごしょくさましよや所司代しよしだいさましよでたや
知しりて清兵衛せいべんと捕とらえんとするとの事こともあはれ
様やうる災難さいなんの来こねやうとつとふと夫つねが常とねふ信しん心しんの北野きたのさ
まへ人ひとふ隠かくしてまのよ毎夜まいよくお参まゐりすれまやを早はや寅とら吉きちの
知しりて居ゐて淋しみしい所ところふタアあの待まちふせ此方こゝろの心こゝろも知しり

らあるいで仇あひ否いやらくらくひ口説くちまを耻ちぢかちぢしてあと思おもひてごも大
事ことのませう人の小せう事じより破やぶれかこと起たちなてな成ならぬト張はりさ
く胸むねの悔くやしさと堪こえこ居ゐれちのを宜よろとみこりて悪わるふさ
け併あ折せりよくさ侍さむらひさまさの助すけけその其場そのばと程ほどよく道みちれ
とま全ぜんく天てん神じんさますの救すけひあらら有あう何卒どうぞ夫との浮うき名な
とてん天てん神じんさまひりの御利益ごりやくで道みちれやまねる様やうみね願ねがひ
申まします何なん様やうもあタあのさ侍さむらひさまう桂けいさまやうのやう様やうもあ
声こゑとあ思おもつあとあ何なんのあ仔し細さいのあ有ありあ氣きちあるあ禮れいもあ宜よろ

う申さず急いで逃げて仕舞へ今さら気がり夫
も附ても寅吉のまう来へ仕まひう左様なれを宜い
が此身の口ろく愛相盡しと言と訳でへりお侍
さまが藪から棒お出て投げ出したのだから彼の
様な厚皮での何と名と附けまうと来るお違ひあ
るまひ困つ事おの最今夜うう氣味が悪くつ
一人での北野さま人往ず然言て晝間の目おとつ嗚呼
何様まうとら宜ううと祈ふ願さし入きて思案お餘

る替の顔を徳太郎の覗き上げへ母ちやぬ氣分が悪
いりや坊の大人しう御本と見る程お母ちやまぬ氣
分と宜くしう大人しう遊んでやト言れてお岩の心
附へ多し母ちやんの氣分の悪くは座いませんサ
百人首のお歌をうたませうドレ何様な画が有りまし
と徳一是の平の蕪盛一忍ぶへど色お出ふけり我が
意の後母ちやんが坊の忘へとうや若しとこのやおも
ふと人の問ふままでト言ひつ再とび溜息つきお二

幼稚子どもも近気分が悪いらと問わゆる程の物お
りひと為る女房み比べてい為せる亭主の身み成
るとその物思ひの何をりり小常の色香と表み
て包めど早晚勤王の同志の招き穂み現れ野末
の芒色み出るより終みお上の耳み入り薄い氷を
踏やうな一日この夏憂き世渡り今の世間の模様でい迎も
無事あつ凌がれまの嗚呼困つとたま溜息吐ば案どて
徳太郎「母アちやま未ど気色が悪いらやト言れそ

再とびん附「おんふと笑顔と作り何の気分が
悪からう坊が大人しくお在どと母アさんの何時で
も嬉しくつて居りますト言ひ掛け耳と倚て二階
を窺がひ少く考え「おや父さんがお目覚み成と
と見える夕アのお帰りが丑刻過で有とくう未ど
お寐て有うと思つと去来と二階へ往て
お床を揚て来ませう坊の此處お大人しく待てお
在と言ひつ眠り庄吉を下お寐うして四辺見え

いゝ二階へ往んと為る時ふ階子をまじく下り来
る清兵衛お岩の二階の口ふ立止り「おや大さう早う
お目覚めでございまし」と清兵衛の欠とあるぐる誰
も来やアあるんところ「ハイ何方もお出での話ないま
せん徳太郎の清兵衛と見て「父ちやん御氣よう
岩「貴君徳坊がお辞宜でございまし」清「イヤ大分伶俐
う成とるト天窓と撫る時何やら勝手に撥墮裡と
倒る音ふ清兵衛身がまへ「エエ怖り」と

第十八回

徳川將軍家茂公近き上洛あらんとて守護職所
司代その他関東の士の容意とりぐるも勤王
の輩と穿鑿して捕えんと為ること倍厳なれば横
田清兵衛とも縛さんと為るの様子なれども薩長
土の士後方お和え且清兵衛の劍術柔術ふ勝れと
る丈夫るると以て捕り害るつて却て害と引き出
さんうとの懸念由る只その動静と窺ふのを會

津桑名の両藩ふても容易ふ手と下すこと倣さる
り清兵衛も是と知る由多油断せず由多先計町
の藤村へも表向あり往ず家ふも又尻と落着かず然
れば前夜も北野の社地ふて桂中村の両氏ふ別
夜更人しづまりて後竊くふ我家へ戻りしあり女房
お岩の大概それと察して居る故見世の者ふも清兵
衛の居ると成るたけ知らさず奥の間ふ置き留守
の体ふて扱へば今朝も飯ごしらへ杯お岩の手づか

らして清兵衛の食事も仕まひ火鉢の側ふ煙草と
呑むぐら心の裡ふ思ふやう夕ア北野で桂やなや中
村さ々の御決議ふ今四五日幕府の官吏の模様と
窺ぐひ當地と出立するとの約條然も無と今日
が母御や妹ふ名残りお岩と始め徳太郎や庄吉
の顔も一時見なさめで長門の地へ祭足するところ
ろで有とが怖々なぐら又四五日の落着尻小常ら
の芝居も言を別盃由多出立の前日ケ宜いと思

ひ又ア遅くハ成とけれども終屋へ往き延く來
と母兄妹や女房子は是で一生の別れと成ら給を
宜い我女房なぐくお岩の眞實あるうへ才氣も人
み勝れとれを假令志と果さずして半途ふ死を
も勤王の人々意と得とを何様あり彼様あり母
と養ひ二人の子供と養育するふ事ハ欠ぬと信
むれども幕府の勢ひまじく盛んある時の如何
あり崇りの有んも知れず若し左様あると何ふ

も知らぬ徳太郎や庄吉まで草葉の肥く成りて
果ん思へば不愆と胸塞がりすやく眠りし庄吉の顔お
見やりて居とるしが清ハお岩自己も不斗しと事か
らして内と外ある放埒み愛相が盡く居やうけれど
少しも悪い顔と見せず慈母と大事みして呉れ妹お
樂み目と掛け徳太郎や庄吉と宜く教育し呉
れるからまア何より一ツの安心此ごろの商法の往
昔と違ひ買出しが肝心ゆゑ去來船が出帆せると

言やア出先から直み江戸へ走るり又長崎へ往り
或の支那の上海香港へ渡るり知れぬが若その様
事でも有とら自己の今の放埒と恨まず年よ
つと者や幼稚子と無理でも有うが詰らぬ役割
み生れ合せて来とのごとと諦め何卒世話と持むと
言て今日や明日出かける様な山もんえぬが大坂兵
庫への月ふ何度となく往由え往と先から出ぬと
も言れぬ何方へ何様してても百里二百里離れと旅殊

み一寸下の地獄と言ふ譬への有る船路寢て居てさ
へ日外の江戸の大地震の様な潰されて死ぬ人もあれ
を増して危うい浪の上トボンと轉倒ささるる脚長
島や手長島腹の無い國へ吹流されるる夫も知れ
ずト言ふと見世みさ人居つて居れを何様やら彼様
やら商賣の出来るものヲ餘計な事と思ふとら
うが其処が年来御恩み成と渡世の冥利ト詰らぬ
所へ意地と張るものも持とが病ひの大和魂ト言や

書生の大言らしの命と的みかけても儲け様との
慾の無つことと外國人らが來て他の國の暴して自
れの利益と計り巨萬の富を得るの残うてから此
方も少一社の根生と傳染させられとのサと話す
とお岩の炭次かけ火箸と灰の突立とま聞居
ぐじが儲の企て一密事の追々迫り天子さぬが
旗揚とやらと為さるう左様で無れを守護職
さぬや所司代さぬの穿儀強さふ身と隠さんと為

るふや有んと推量りてい今更み胸踊とども止とぐ
宜う止ずふ置の身の為り分ち無れを哀一さの涙と
飲こそ笑顔とはくり岩おほく何の役みの立ぬ私由
お心助けふも成りませぬ餘儀多の訳のお有んなさ
るとい言なぐう家程染のいものヲ他所へお寐泊
りのお心支ひの御容子でも知れて居りお厭しい事
と思ひまけを胸と痛み片時休まる間の泣をい
ませ福と力及をぬ女の身せめて貴君のお代りふ

慈母さるやお染さんのお氣の易い様みして上げ申
一徳太郎の實語教の一條も覚えさせ庄吉の虫氣
の出ぬ振育てますと吾侪の役と思つて居ります
ら近い所にお在のちう幾日お歸りがなつても貴君
の御無事と祈りますのとお按事申し致しませぬ
と遠いところへお出が有り殊に船下の悪い風小遇
と艱難を為るものと聞て居りますに故お母さるの
お心とお察し申し徳を希や庄吉の事と思ひますと

ば哀しい山々なれど是まで安穩に私いどもとお養
ひ下さいますと渡世の恩義で見世のお為と思しぬ！
旅へ往ねばあらぬとあら無理にお止し申しません
お留守の所へ身と摧いても私いが見世の人達と相
手あしてお母さるや徳太郎庄吉にお預り申します
が只今もお話しの通り寐て居て死る人もあれば老
少不定の譬へと思ふと貴君の本身の上をうりでの
をくお母さるへお年も多く吾侪の身や徳太郎庄

昔^きとて由^ゆいつ何時^{なんどき}とんる病^{やま}ひみ取り附^つれ若^わりの事^{こと}
 の有^あるものゝ心の^{こころ}は^はいません夫^{それ}と思^{おも}ふと出^で
 先^{さき}から直^すふお立^{たち}ふ成^なるやうで^より餘^よ所^{ところ}へお出^{いで}の度^{たび}毎^{ごと}に
 今^{いま}かお顔^{うら}の見^みおさめお成^なりのせまのり是^{これ}が旅^{たび}路^ぢの
 お別^{わか}れうと思^{おも}へた女^{おんな}の心^{こころ}う^う励^げますれ^きでも哀^{あは}しく
 涙^{なみだ}と翻^かす様^{よう}なとで^ある貴^{あなた}君^{きみ}も不^ふ祥^{しやう}お思^{おも}ひ^おめ^めに
 せうしお母^{はは}さんやお楽^{らく}さんお見^み答^{こた}められま^まい物^{もの}で
 も泣^なか^かいません是^{これ}を^を理^りう知^しれませんが

一言^{ひとこと}是^{これ}う^う立^{たち}と
 仰^{あう}えやり聞^きせて下^{くだ}
 さう譯^{わけ}めい
 往^いませんう^うエ
 若^わし貴^{あなた}君^{きみ}。エ貴^{あなた}君^{きみ}
 と思^{おも}はず潤^{うる}む涙^{なみだ}の
 目^めり^りと子^こみ^み見^みせ
 トと顔^{うら}と北^{きた}月^{つき}けても徳^{とく}



太郎とらうの親かぞき揚あげコレ母ははアちやまお父ちちちやまお餘よそ所ところへ
往ゆず大人おとなあう坊ぼうも言いふ事ことあなどみ目めん目めと
拭ぬき笑わらとてや喃なん母ははさまと膝ひざみ繰すられお岩いわの最もとど哀あは
しくて泣ないと為なれを猶なほ迫せまる涙なみだと漸あ飲のを込こんで
坊ぼうが言いふととゆき父ちちさんへ大人おとなあう為なさるお母ははさ
んが何なんのまア泣なませう母ははさんへ泣ないせぬ泣なぬと言いふ
さん口くち隠こもりて涙なみだの雨あめと堰せきかねッ思おもはずよと伏ふ沈しづめ
志し徳とく太郎とらうの有う漏ろうと目めの涙なみだと溜たまぐら
竹たけ大おほ顔がほ

と作つくって父ちち親おやの膝ひざみすがり父ちちちやま母ははちやまの太おほ
人ひとしう為なる程ほどみ最もと表あはへい遊あそびみ往ゆずお家うちみ居あて百ひゃく
人ひと首くびのお歌うたと讀よんで中なかとの愛あ相さうの七なな歳さい未ま満まんも母はは親おや
み歎なげりせととの心こころより我われみ機き嫌げんを取とるうと思おもへば流なが
石いしみ猛まき清せい兵べい衛ゑいも涙なみだの雨あめの一ひとト零し思おもはずろりと
翻ひるがせが氣きを取とり直なして苦く笑わらひ「ははは」是これ坊ぼうよ父ちち
さんさんの最もとどこへも往ゆず大人おとなしう母ははさんと坊ぼうと庄しやう吉きちと
して遊あそぶからサアく母ははさんさんも庄しやう機き嫌げんと直なし目めん目め

と拭てお獅子やも舞が宜いと言へば忙しく徳太郎
可アお太鼓と出いませう母ちやま探で叩いてやト
母と慰め父親ふ愛と求むる氣遣ひの西も東も
未ど知らぬ幼稚児ふまで可愛やな幾その苦勞
と為せると増してお岩の内氣な生質然れども
迂潤の性なあらねを長州侯や薩州侯の藩士ま
とい諸方の浪士とちが出這入りして寐泊りとも為
し事あれを攘夷鎖港のその話しの決して受さぬ

様ふ志とれど酒宴するの定式なる故酔が廻ると我
と忘れ幕吏が腰の抜しと譏り赤髯らが暴なる
所置と悪むより終ふ話しの慷慨激烈ふ直ると以
て我とも勤王の徒と疾ふ察し大和の天の川辻ふ
て藤本鐵石氏らが討死しまこと此程石見の生野
あく平野國臣氏らが俘虜となり特ふ平野氏よ
りの手紙とも届けとれを其度々胸を痛めるお
岩の顔色然れども是までおの事成言ぬの言ふ

強増る心の中が察しられ不愍の者との思ふりの
から小事と顧み大事と過つとありては同志へ濟
ねを歩明て宜う言れず却つて餘計な苦と掛るり
彼をりり家族へ案トと為せても清水の月照御坊
と始めとして同盟の徒の事と遂に半途み果ると
見るみはけしふ七分の我もまると幕吏の刀の錆と
成りまん着目なれも支も本懐然れどもお岩や子
供らの後の歎き何をりり斯様の事があるれを

何故始めから知らして呉ぬと母やお岩お怒る
るが黄泉の障りや何の已が死どとして親へせても
子の育つ然い言へ徳太郎や庄吉いと心よ思へを
兄の顔弟の寐顔と覗き見てポロリと離す涙の雫
齒と食ひ去るを吐息つき「お岩酒と燗として
呉れ徳よ太鼓ホイ庄吉が目と覚しとぞオ宜子ジ

